

週刊 武四郎

第31号

2018年(平成30年)11月7日(水)
発行・松阪市

●毎月第一週は、
松浦武四郎の人となりについて
ご紹介いたします

監修・松浦武四郎記念館

情報屋武四郎

ペリーの黒船が来た時、武四郎さんは宇和島藩からの依頼を受けて情報収集のために下田に潜入しています。この時の手紙に、

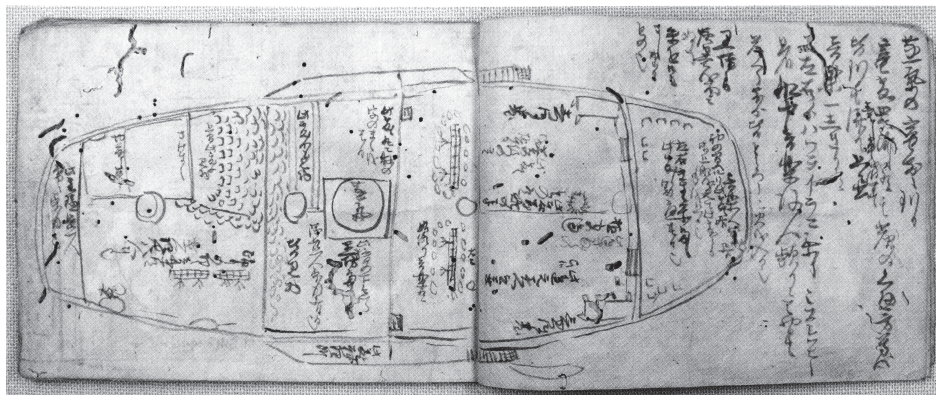
「何事二而も其日之事、其四ツ時頃は私方へしれ申候」と、なにやら自慢げな一文があります。夜の十時頃になると、私のところへその日の情報が入ってくるのだ、ということです。

当時、日米交渉の情報を得ようと各藩から様々な人がやって来ていましたが、なかなか情報を得られず切歯扼腕している時に武四郎さんは、この余裕の発言。確かに、武四郎さんがいろいろな人に宛てた下田からの手紙を見ると、ペリー一行との晩餐会のメニューから、「ペリー艦隊は帰途、琉球に寄港するらしい」といった情報まで、わりと

正確に捉えています。いたい武四郎さんは、どこからその情報を得ていたのでしょうか？

どうやら武四郎さんは〈御庭番〉と呼ばれる家系の人々と親しかったようなのです。もしかしたら、そうした筋から情報を得ることができたのかもしれませんが(幕府情報網との関係は、今月二十一日配信に改めて書きたいと思います)。

当時、武四郎さんからの手紙が届くと(なにしろコピーなどない時代ですから)、みな争うように筆写しました。ロシアの船が地震による津波で座礁したというくだりなど、「まさに神風が吹いて夷狄を追い払ったのだ」と、人々は感涙にむせびながら書き写したとい



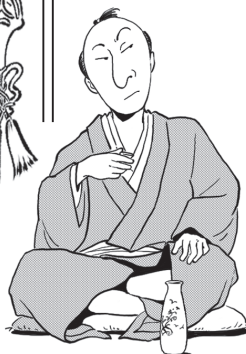
▲アメリカのペリーが再来航し、日米和親条約締結のため伊豆の下田に滞在した際、武四郎は幕府の応接の経過や、軍艦の平面図、食事など、ペリー一行の様子を詳細に調べて記録している。「豆遊日誌」より(松浦武四郎記念館蔵)

も多かったようです。
「今少し、落ち着いてテイネイに書け」

と、武四郎さんに宛てた苦情の手紙も残されています。それにしても、武四郎さんほど旅慣れていて、足が速くて、そして筆まめの人はそうそういないでしょうから、情報屋にはうってつけの人材だったといえそうです。松浦武四郎という人にそうした一面があったということは、その人物像を考える上で重要な要素であるのかもしれない。

松浦武四郎 (1818～1888)

三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今の北海道)を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として〈北海道〉のもととなる〈北加伊道〉を含む6案を政府に提案したことから〈北海道の名付け親〉と称される。



文・河治和香 装画・りんたろう 編集・細山田正人 デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』(河治和香著)が、小学館より好評発売中!

